

主体的な学びとなる道徳科の授業

森下 雅一

1 はじめに

平成 30 年度より、公立小学校では、「特別の教科 道徳」（道徳科）が完全実施となった。その背景のひとつに、深刻化するいじめ問題への対応がある。

筆者は公立小学校で学級担任をしている。筆者が担任している学級の子どもたちの様子を見ていて、ひととの関わり方が上手ではないと思う場面が多々ある。それは、友だちとけんかをしてしまった時に、お互いに言い分をもう少し聞けば、けんかにはならなかったといったことである。もちろん、子どもたちの発達段階も考慮しなければならないが、ひとと上手に関われないのは、子どもたちを取り巻く生活環境が大きく変化していることも大きな要因であろう。生活環境の変化の要因として、IT などの情報技術の進展がある。スマホや AI など IT 技術の高度な進展により、われわれの生活は便利になった一方で、ひととのつながりが極めて変化してきた。直接顔を合わせなくとも、デジタルの世界でつながることができる社会となっている。

こうしたデジタル社会は、人間関係をとて複雑なものにしている。スマホや AI があれば、ひとりで生きていけるように思われる。だが、現実問題として、ひととはひとりで生きていくことはできない。他者とのつながりが必要なのである。子どもたちがよりよくひとと関わっていくために、道徳科の授業では、「道徳性の育成」が求められるのである。

「道徳性の育成」のために、道徳科の授業が子どもたちにとって主体的な学びとならなければならない。道徳的課題に対して、自分はどうすべきか、あるいはどうしたらよいのかを子どもたちに自身に考えさせる。そこで、本稿では、子どもたちが主体的に考えるための視点として、「当たり前」を問い直すことについて考察する。

2 道徳科の完全実施

平成 30 年度より、道徳科が完全実施となった。これまでの「道徳」から「道徳科」となった背景には、いじめ問題への対応がある。『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道徳』（以下、「解説」と略記）では、下記のように記されている。

今回の道徳教育の改善に関する議論の発端となったのは、いじめの問題への対応であり、児童がこうした現実の困難な問題に主体的に対処することのできる実効性ある力を育成していく上で、道徳教育も大きな役割を果たしていくことが強く求められた。（3 頁）

子どもたちがこれから生きる社会とは、「今後グローバル化が進展する中で、様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きることや、科学技術の発展や社会・経済の変化の中で、人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図ることが一層重要な課題となる。」（「解説」、1 頁）という社会である。多様な背景をもつ相手と、よりよく関わっていける力が求められるのである。そのために、学校教育では、道徳性をはじめとして、他の教科等では、次期学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」を通じて、子どもたちに多様な力を育てていくとしている。

道徳科において、「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、「発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う『考える道徳』、『議論する道徳』へと転換を図る」（「解説」、2 頁）ことが必要となる。いじめ問題など、今日の極めて変化の激しい社会において生じる道徳的な問題を主体的に考え、友だちと話し合っ、よりよく解決していく力を子どもたちに育てていくのである。

3 道徳科の授業で変わることを、変わらないこと

道徳科の完全実施となり、道徳科の授業において変わったことを整理すると、検定教科書を使って授業をすること、道徳科における子どもの評価を行うことがある¹。また、変わらないことは、道徳教育は全教育活動を通じて行うこと、道徳科の授業

¹ 『初等教育資料』、2018 年 12 月号、東洋館出版社、2 頁

時間は年間 35 単位時間（小学校第 1 学年は 34 単位時間）以上行うこと，そして，道徳教育も道徳科も，その目的は，子どもたちの道徳性を養うことである²。

道徳科がはじまり，検定教科書の使用など変わった点もあるが，これまでの道徳の授業や道徳教育で取り込まれてきた子どもたちの道徳性を育むという点は，道徳科でも本質的に変わらない。では，変化の激しい社会に生きる子どもたちが，道徳性をよりよく育てていくために，どのような道徳科の授業を行うのであろうか。子どもたちが道徳的課題を主体的に考えるために，「当たり前」を問い直す道徳科の授業が考えられる。

4 道徳科の授業の目標

次期学習指導要領において，道徳科の授業では，「考える道徳」，「議論する道徳」となる学習活動が求められる。これは，他教科などの授業でも「主体的・対話的で深い学び」となるように関連していく。このような学習活動を通して，学習課題に対して，子どもたち自身が主体的に考え，考えたものを生活班や学級の友だちと話し合ったり，意見交流したりして，学習内容をより深く理解できるようにするためである。道徳科の目標は，子どもたちが道徳性を育むことである。学習指導要領では，道徳科の目標の具体的な内容について，次のように明記されている。

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために，道徳的価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる。

上記の目標を達成するために，道徳科の授業では，「考える道徳」「議論する道徳」となる学習活動によって道徳性を育てていく。道徳性について，学習指導要領では，「人間としてよりよく生きようとする人格的特性」（「解説」，20 頁）と記されている。「自己の生き方」を考えるために，自分自身の成長，約束や決まりを守ること，友だちと仲良くすること，自然環境を守ることといった道徳的価値について，子どもたちが考えていく。それは，いまの自分自身の生活にかかわってくることでもあるし，子どもたちが大人になる時にかかわってくることである。それは，「日常生活や今後出会うであろう様々な場面，状況において，道徳的価値を実現するための適切な行為

² 同上，2-3 頁

を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質」（「解説」,20 頁）ということである。

子どもたちはこれから、国籍や文化、歴史的・社会的背景などが異なる人々と関わって活動や仕事などを行うことが考えられる。子どもたちがそうした社会においてよりよく生きるためには、相手との関わりは必然的に生じる。子どもたちが他者とよりよく関わるができるように、道徳科の授業では「道徳性の育成」が求められる。

5 主体的に学ぶために

子どもたちに道徳性を育むため、道徳科の授業において、様々な道徳的価値について考えさせる。道徳的価値について、学習指導要領で示されている価値項目³には、「過ちは素直に改め、正直に明るい心で生活すること。」（第 3 学年及び第 4 学年）や、「誰に対しても差別することや偏見をもつことなく、公正、公平な態度で接し、正義の実現に努めること。」（第 5 学年及び第 6 学年）といった内容がある。それらは、子どもたちの生活の中では、多くの場合「当たり前」として認識されているものである。あるいは、これまでの体験から「当たり前」となっていることもある。他の授業でもそうであるが、子どもたちは、すでに知っていたり、分かっていたりすると、自ら考えようとはしない。換言すると、すでに知っているのだから、考えなくともよいのである。「嘘をつかない」「友だちとは仲よくする」「自然は大切にする」などは、子どもたちはすでに知っていたり、分かっていたりする。他方、道徳科の時間で学習したはずなのに、授業中に調子に乗って騒いでしまい周りの友だちに迷惑をかけてしまったり、休憩時間にけんかが起きてしまったりすることがある。こうしたことから、子どもたちが、道徳的課題を自らのこととして考える、主体的に考える道徳科の授業が求められる。

道徳科の時間が、子どもたちにとって主体的に考える時間となるためには、どうすべきか。そこで筆者が取り入れているのが、「当たり前」を問い直す道徳科の授業である。「当たり前」を問い直すという着想を得たのが、筆者が学生時代に研究した

³ 学習指導要領では、「A 主として自分自身に関すること」「B 主として人との関わりに関すること」「C 主として集団や社会との関わりに関すること」、そして「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」という 4 つの観点から、第 1・2 学年では 19 項目、第 3・4 学年では 20 項目、第 5・6 学年では 22 項目に分類されている。

倫理学である。倫理学について、簡単に整理すると下記の通りである。

倫理学は倫理について考える学問です。では、考えるとは具体的には何をするのか。まずひとつは、「x すべきだ／してもよい／してはならない」「x (すること) はよい／悪い」と教える倫理に向かって、「なぜ、x すべき／してよい／してはならないのか」「なぜ、x (すること) はよい／悪いのか」とその理由を問うことです⁴。

「〇〇すべき／すべきではない」について、なぜという問いとその理由を考えること。このようなアプローチで、子どもたちが「当たり前」に思っていることを問い直し、立ち止まって考えることで、道徳的課題を主体的に考える契機となる。

子どもたちは、「約束や決まりは守らなければならない」「友だちとは仲良くする」「自分勝手なことはしない」「自然は大切にしないといけない」といったことは、小さいころから聞かされて育ってきている。では、なぜ、道徳科の授業があるのか。そこで、筆者は、年度初めの道徳科の授業で、以下のような話をしている。

みんなは、道徳の時間は、どんな時間だと思いますか。

みんなは、「自分勝手なことはいけない」「友だちとは仲良くする」「地域の見守りボランティアの人に会ったらあいさつをする」「自然は大切にすること」などといったことを聞いていると思います。

では、なぜ、道徳の時間で、そうしたことを考えるのでしょうか？

これからみんなは、社会の中でたくさんの人と関わって生活していきます。自分とは年の違うひとかもしれないし、外国のひとかもしれません。あるいは、関わる相手は、自然かもしれません。そんな相手と、どのようにすればよりよく関わられるのか。よりよく関わっていくために必要なものが、「自分勝手なことはいけない」「友だちとは仲良くする」といったことです。でも、これらは、みんなはすでに知っているし、「当たり前」だと考えていると思います。では、すでに知っているのに、なぜ、道徳の時間で学ぶのでしょうか。

道徳の時間は、「自分勝手なことはいけない」や「友だちとは仲良くする」など、みんなが思っている「当たり前」を問い直して、もう一度考え直してみる時間だと考えることができます。「当たり前」を問い直してみて、「やっぱり、それは当たり前だよね。」と思うかもしれないし、友だちの考えを聞いて、「なるほど、そのようにも考えられるのか。」とも思うかもしれません。道徳の時間では、そうした「気づき」が

⁴ 品川哲彦『倫理学の話』,ナカニシヤ出版,2015年,6頁

大切です。

道徳科の教科書にある読み物資料を読んで、子どもたちは授業の最初の段階で、「今日は、思いやりについて考えるんだな。」と考えてしまうことがある。そこで、「当たり前」に思っていることを問い直し、道徳的価値について「なぜ」と考え、友だちと話し合うことで、その道徳的価値はやはり大切であるということや、道徳的価値について多様な捉え方があることに気付く。年間 35 時間（小学校 1 年生は 34 時間）の道徳科の授業で、「当たり前」を問い直す学習活動の積み重ねが、道徳科の授業における主体的に学ぶ時間となり、それが道徳性の育成につながると考えられる。

こうした学びのためには、子どもたち自身が考え、それを友だちに伝えたり、友だちの考えを聞き、話し合ったりすることも必要である。互いに意見交流をすることで、友だちはどんなことを考えているのか、自分の考えと同じであったり似ていたりするのか、あるいは、自分の考えとは異なるアプローチで考えているのかといったことを知ることができる。互いに考えを聞き合う、話し合うことを通じて、道徳的価値に対する考えを深めていくことで、子ども自身の道徳性がよりよく育っていく。

6 道徳科の授業の実際

「当たり前」を問い直す道徳科の授業の実際として、「なかよしタイム」という教材文⁵から「相互理解・寛容」について考える授業⁶を本節で取り上げる。

道徳科の授業における「相互理解・寛容」という価値項目について、第 3 学年及び第 4 学年の指導の要点として、「解説」では下記のように示している。

指導に当たっては、相手の言葉の裏側にある思いを知り、相手への理解を深め、自分も更に相手からの理解を得られるように思いを伝える相互理解の大切さに気付くようにすることが大切である。日常の指導においては、児童同士、児童と教師が互いの考えや意見を交流し合う機会を設定し、異なる考えや意見を大切にすることのよさ

⁵ 『かがやけみらい 小学校 どうとく 3 年』, 学校図書, 2018 年, 82-85 頁。

⁶ 平成 30 年度第 3 回広島市小学校教育研究会 研究会 B 道徳科部会(12 月 3 日木曜日)での授業研究。授業展開については、本稿末に示した参考資料①の学習指導案、参考資料②の板書の写真を参考にさせていただきたい。

を実感できるように指導することが大切である。(49 頁)

価値項目「相互理解・寛容」は、第 3 学年及び第 4 学年より取り扱う内容である。相手のことを思いやるだけでなく、自分とは考えが異なる相手とどのように関わっていくのか、どうすれば互いを理解し合えるのかを考える内容となっている。

「なかよしタイム」の教材文の概略は、下記の通りである。

物語の主人公「ぼく」の学級では、みんなが仲良くなるために行う「なかよしタイム」というレクで、ドッジボールをした後に、つよし・けんじとみち子・ひろ子の間でもめ事が起こる。

つよし・けんじは、ボールも取らずに逃げてばかりで、外野に出るとおしゃべりをして、それでちゃんと遊んだと言えるのかとみち子・ひろ子に詰め寄った。その一方、みち子・ひろ子は、先月の「なかよしタイム」で鬼ごっこをした時、つよし・けんじは、ちゃんと走らず、途中で追いかけるのをやめてしまったことから、それでちゃんと遊んだと言えるのかと詰め寄った。

お互いに言い分はあるのだが、自分たちの考えを一方向的に言うだけで、相手の考えを聞かず、言い争いになりそうな状況となった。そこで、「ぼく」がその間に割って入り、双方の気持ちを整理して伝えた後で、「次の『なかよしタイム』では、遊びを決めるだけでなく、みんながもっと楽しく遊べるように、遊び方も考えようよ。」と提案する。

この授業の学習目標は、「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、相手のことを理解し、自分と異なる意見も大切にしようとする態度を育てる。」である。

授業の導入のはじめに、「相手の気持ちも大切に」について考えることを子どもたちに示した。この点を先に示すことで、この授業で考える価値項目「相互理解・寛容」について、子どもたちがどのように考えるのかという見通しをもたせるようにした。そして、教材文から、男の子のたち、女の子のたちの言い分や気持ちを捉えた後、中心発問である「『ぼく』はなぜ、『自分の気持ちだけでなく、相手の気持ちを大切に、遊べるようにしようよ。』と言ったのでしょうか。」について、子どもたちに考えさせ、それをワークシートに書かせた。ワークシートに自分の考えを書いた後、生活班の友だちと考えを聞き合う活動（グループトーク）を行った。その後、学級全体で考えを発表した。

子どもたちは、「相手のことを考えないといけないよ。」「自分の言いたいことばかりを言っただけで、言い争いになるよ。」とワークシートに書いている子どもが多かった。

もちろん、自分の言いたいことばかりを言ってもだめだし、相手のことを考えなければならぬ。ここで重要な点は、「相手の気持ちも大切に」(強調は筆者)である。

「相互理解・寛容」という価値項目について考える授業では、子どもたちの思考の流れとして、友だちのことを考えないといけぬという「思いやり」の道徳的価値に向かっている子どもは少なくなかった。もちろん、「寛容」でも、相手のことを考える要素はあるが、自分の考えとは相容れない相手とどのように関わっていくのかということを考えることが重要なのである。そこで、「寛容」について理解する際に、下記の説明が参考になった。

この世界で出会うのは同質的な人々ばかりではありません。なかには、とても共感できそうにない、自分とはまったく異質な人々もいるでしょう。どうしても分かり合えない人々に対して、私たちはどのように振る舞えばいいのでしょうか。自分自身とは相容れない、思想信条も異なる人々に対して、その存在を認め理解すること。この姿勢は、「寛容」と呼ばれます。共感が感情を介した他者との分かり合いであるのに対して、寛容は理性を介した他者との相互理解です。……理性を働かせて、相手のことを理解し、その存在を認めなければなりません⁷。

子どもたちがこれから生きていく社会において、自分の考え方とは異なる相手と何かしらの活動などで関わらなければならない状況が生じる。その際に、自分の考え方とは合わないけれども、どこかで折り合いをつけて関わる必要がある。自分の考えが相手に伝わらないといけぬし、相手の考えも理解しないといけぬ。自分の考えとは相容れない相手とどうしても関わる必要がある場面では、相手のことを思いやることはかなり困難である。そこで何とか関わっていくために、理性を働かせることで、その相手と関わるのが可能となる。それは、教材文「なかよしタイム」を端緒として、互いの考えに耳を傾け、自分の考えと相手の考えをすり合わせ、どこかで妥協点を見出すように考えることである。

子どもたちの発言の中に、「みんなが納得しないといけぬ。」とあった。考えが異なる者同士がどこかで納得する点、折り合いをつける点を見つける。そのためには、話し合いを重ね、自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを捉えたりすることを重ねていくことで、互いが納得できる点を見出す。「相手の気持ちも大切に」(強調は筆者)とは、相手の考えをただ受け容れるだけでなく、自分の考えを言葉

⁷ 越智貢監修『見てわかる！道徳』、第2回「相互理解、寛容」と「公正、公平、社会正義」,「どうとくのひろば No.15」, 日本文教出版, 2016年。

で伝えることも含まれる。この授業の学習目標である「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、相手のことを理解し、自分と異なる意見も大切にしようとする態度を育てる。」ために、「相互理解・寛容」という道徳的価値に対して考える際には、多様なアプローチがあることに「気付くこと」が大切である。

道徳科の授業で、子どもたちは一生懸命道徳的課題について考え、ワークシートにしっかり自分の考えを書いたり、グループトークで友だちの考えを聞いたりしても、授業中にふざけすぎてしまい友だちに迷惑をかけてしまったり、休憩時間にドッジボールのルールを巡ってけんかをしたりすることも考えられる。

もちろん、1 回の道徳科の授業だけで、子どもたちの道徳性が育まれるのではない。道徳科の授業のひとつひとつの積み重ねが大切である。道徳科の授業では、道徳的価値に対する子どもたちの理解をテストの点数などのような形で見取することはできない。だからといって、子どもたちに何ら道徳性が育っていないわけではない。「ルールを守る」「友だちを思いやる」など、子どもたちが「当たり前」と思っている道徳的価値を問い直すことで、考える必然性が生まれ、そこから道徳的価値の多面性への気付きを増やしていくことが大切である。

7 おわりに

本稿では、子どもたちが「当たり前」に思っていることを問い直す視点で道徳科の授業を展開していくことについて考察してきた。

平成 30 年度より、検定教科書を使用した道徳科の授業がはじまった。子どもたちが「当たり前」を問い直すことで、道徳科の授業が、「主体的・対話的で深い学び」、そして「考える道徳」「議論する道徳」という学びになる。「当たり前」を問い直す中で、子どもたちは道徳的課題について考え、そこから道徳的価値の多面性に「気付かせる」のである。

道徳科の授業では、子どもたちの道徳性を育むことを目的とする。では、「道徳性」とは何か。「解説」では、「人間としてよりよく生きようとする人格的特性」とあり、「道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度」(20 頁)という諸様相で構成されていると記されている。また、1950 年第 3 次吉田内閣で文部大臣を務めた天野貞祐は、「道徳」について、次のように語っている。

道徳とはどういうことかというならば、その一つの法則として出てきたものは、それに私達が従わないというと、社会が成り立たないという、そういう原理をいう

のであります。即ち私達が、社会を成り立たせるためには、是非それに従わなければならない道筋が道德であります⁸。

子どもたちは将来、変化の極めて激しい社会の中で色々な人々と関わりながら生きていかななくてはならない。自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを知ったりして、よりよく課題を解決していくことが求められる。その際に必要となるもののひとつが、道德性である。

天野は、「道德の本質は変わらないけれども、その実現する仕方が変わった。」⁹と述べている。「自分勝手をしない」や「友だちと仲よくする」といった道德的価値は、その社会の中で共有されていないと、ひとは生きていくことはできない。だが、スマホや AI など高度情報化社会のように、今日の社会状況では、道德的価値の現れ方は異なっている。

学習指導要領で示されている「道德性」と天野の語る「道德」との関連性、「道德性」と子どもたちの「当たり前」との関連性、現在の社会状況における「道德性」の位置づけについて、本稿では取り扱えなかったので、別の機会に譲りたい。

【参考文献】

- 天野貞祐 『天野貞祐全集 第一巻 道理の感覚』, 栗田出版会, 1971 年
『天野貞祐全集 第六巻 道德教育』, 栗田出版会, 1971 年
品川哲彦 『倫理学の話』, ナカニシヤ出版, 2015 年
関西倫理学会編「シンポジウム 道德の教育—その可能性と不可能性」, 『倫理学研究』第 45 号, 2015 年
文部科学省『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別の教科 道德編』, 2018 年
坂本哲彦『小学校 新学習指導要領 道德の授業づくり』, 明治図書, 2018 年
坂本哲彦『道德授業のユニバーサルデザイン』, 東洋館出版社, 2014 年
永田繁雄編集『「道德科」評価の考え方・進め方』, 教育開発研究所, 2017 年
『どうとくのひろば No.15』, 日本文教出版, 2016 年

⁸ 天野貞祐「道德教育について」(1959 年), 『天野貞祐全集 第六巻 道德教育』, 栗田出版会, 1971 年, 15-16 頁。

⁹ 同上, 18 頁。

【参考資料①】

道徳科学習指導案

広島市立牛田新町小学校

指導者 森下 雅一

- 1 日時 平成 30 年 12 月 13 日 (木) 14:30～15:15
- 2 学年・組 第 3 学年 1 組 25 名 (男子 13 名 女子 12 名)
- 3 主題名 相手の気持ちも大切に
- 4 教材名 「なかよしタイム」(『かがやけみらい 小学校どうとく 3 年』, 学校図書)
(B11 相互理解, 寛容)

5 主題設定の理由

(1) 主題について

本教材の主題は、学習指導要領の内容項目「B 主として人との関わりに関する こと」にあたり、「相互理解」について学習する。

この時期の児童は、自分の考えと友だちの考えの違い、物事に対する自分の感じ方と友だちの感じ方などの違いを概ね理解できるようになってくる。しかし、考え方や感じ方の違いを受け止められず感情的になったり、それらの違いから対立が生じたりすることも少なくない。広がりや深まりのある人間関係を構築するために、自分の考えや思いを相手に言葉で伝えるとともに、自分の考え方や思いとは異なる考えや思いについて、その背景にあるものは何かを考え、相手の思いを傾聴できるようになることが必要になる。

本教材で扱う内容項目「B11 相互理解, 寛容」は、第 3・4 学年より始まる。第 3・4 学年では、「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、相手のことを理解し、

自分と異なる意見も大切にすること。」について学び、第 5・6 学年では、「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること。」について学ぶ。

第 3・4 学年の指導では、相手の言葉の裏側にある思いを知り、相手への理解を深め、自分も更に相手からの理解が得られるように思いを伝える相互理解の大切さに気付くようにすることが大切である。そして、第 5・6 学年の指導では、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重することで、違いを生かしたよりよいものが生まれるといったよさや、相手の過ちなどに対しても、自分に同様のことがあることとして謙虚な心、広い心で受け止め、適切に対処できることが大切である。

本時の学習から、互いの違いを認め合い理解しながら、自分と同じように他者を尊重する態度を育てるために、多様な人間が共によりよく生き、創造的で建設的な社会を創っていくために必要な資質・能力を育んでいく。

平成 30 年度より、小学校で完全実施となった「道徳科」の背景には、今日的な重要な課題のひとつであるいじめ問題への対応がある。いじめの未然防止に対応するためにも、本教材は、児童が身近な問題として考えるために有効である。

(2) 指導にあたって

導入では、事前に大休憩での遊び方についてアンケートを取り、その結果をパワーポイントで示す。このことにより、本時で考える学習内容が、自分たちの身近にある問題として主体的に考えられるようにする。

教材の内容は、自分たちの学級でも起こりうる身近なもめ事として考えることができる。児童は、友だちの言うことに耳を傾けて相手を理解するということは、これまでの生活の中で知っている。だが、中学年の発達段階から、大休憩での遊びや活動に夢中になり、自分の言いたいことばかりを言うてしまうことがある。こうした実態から、「相互理解」の大切さについて気付かせる必要がある。そのために、「ぼく」の視点から、つよし・けんじとみち子・ひろ子のそれぞれの言い分やその時の気持ちを考えることで、相手の言葉の裏側にある思いを知り、自分も相手からの理解が得られることの大切さを学習させる。

授業では、場面絵を黒板に掲示したり板書を構造化したりして、4 人の子どもの言い分や気持ちを視覚化し、一人一人の児童が「ぼく」の視点から、どうすればみんなが「なかよしタイム」の時に楽しく遊べるのかを考える。課題解決の際に、児童が主体的に考えられるように、まずワークシートに自分の考えを書かせる。その後、グループトークを行い、意見を互いに聞き合う中で、児童が自分の考えを深められるようにする。グループトークの活用は、国語科や学級活動

などでの話し合い活動において、自分の考えを友だちに伝えたり、友だちの考えを聞いたりする活動につながる。また、本時で扱う教材は、自分とは異なる相手の意見や考えを認め、受け入れることのよさについての考えを深めることから、いじめ防止にもつながる。

6 本時のねらい

自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、相手のことを理解し、自分と異なる意見も大切にしようとする態度を育てる。

- 7 準備物 場面絵、ワークシート、
自分の考えを書きやすくするための言葉を入れたワークシート（ヒントカード）

8 本時の展開

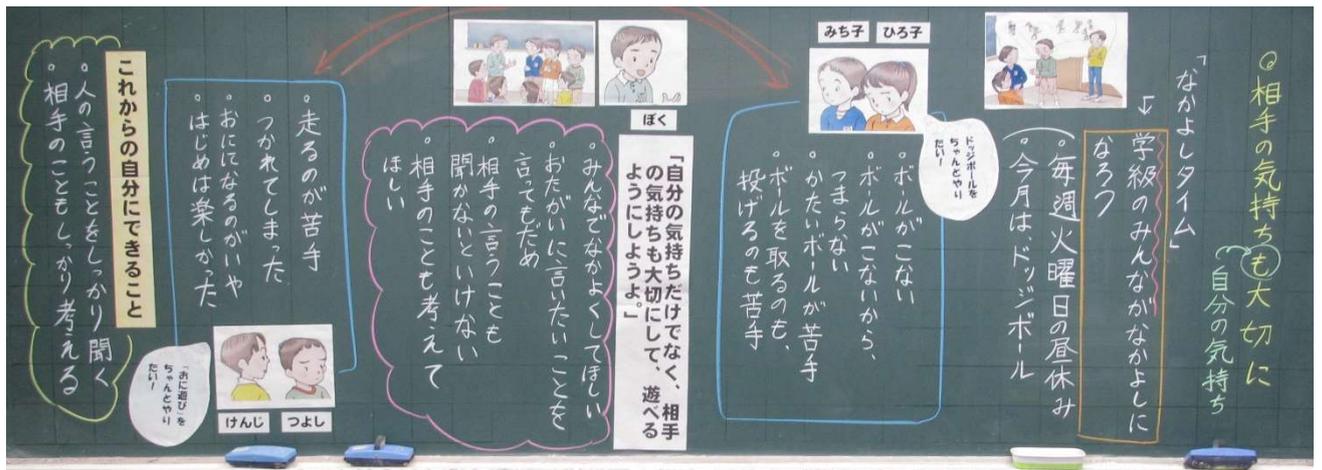
	主な学習活動 ○発問 ◎中心発問 ・予想される児童の反応	指導の工夫・評価 ●支援 ☆評価
導 入	1 休憩時間の遊び方のアンケート結果を提示し、遊びの好みにはそれぞれ違いがあることを知る。	●パワーポイントを使って、児童の学習意欲が高まるようにする。 ●アンケート結果を示すことで、本時では相互理解について学習するという見通しをもたせる。
展 開	2 教材を読み、「ぼく」の視点から、もめ事の原因を考える。 ○みち子やひろ子は、どんな気持ちで	●「ぼく」の視点から教材文を読み、課題把握させる。 ●場面絵を黒板に貼って、もめ事が起きた状況を視覚的に理解できるようにする。

<p>前 段</p>	<p>ドッジボールをしていたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・がんばってさんかしていたわ。 ・かたいボールが苦手。 ・ボールを投げるにも取るのも苦手。 ・外野に出るとボールが回ってこない。 ・やることがなかったのよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「なかよしタイム」だから、何とかがんばって参加したみち子やひろ子の心情を捉えさせる。
<p>展</p>	<p>○つよしやけんじは、どんな気持ちで「おに遊び」をしていたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・走るのが苦手なんだ ・とちゅうでつかれてしまった ・はじめは楽しかったんだ <p>3 ワークシートに自分の考えを書く。</p> <p>◎ 「ぼく」はなぜ、「自分の気持ちだけでなく、相手の気持ちを大切に、遊べるようにしようよ。」と言ったのでしょうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「おに遊び」は苦手だけど、遊びには参加したつよしやけんじの心情を捉えさせる。 <p>☆ 「ぼく」の視点から、互いの考えを認め合うことの大切さについて、自分なりの考えを書くことができる。 (記述、発言)</p>
<p>開 前</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで楽しく遊びたいから。 ・おたがいに言いたいことを言ってもだめと思ったから。 ・みんなで遊び方を考えれば、みんなで楽しく遊べるから。 ・遊びが苦手な友だちのことも考えないといけないから。 ・どっちの言っていることも分かるから。 	<ul style="list-style-type: none"> ● ワークシートに自分の考えを書くことが苦手な児童に対しては、自分の考えを書きやすくするための言葉を入れたワークシートを使用する。
<p>段</p>	<p>4 ワークシートに書いたものをグル</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● グループトークの時に、自分の考えと似ているか、異なっているのかを

	<p>ープトークで互いに聞き合って、自分の考えを深める。</p> <p>5 学級全体で意見交流し、道徳的価値を深める。</p>	<p>比較し、友だちの考えのよさを考えながら聞き合うようにさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●学級みんなに教えてあげたい考えを見つけながらグループトークをさせる。 ●グループトークの時に聞いた友だちの考えの中で、学級みんなに教えてあげたい考えをまず発表させる。
<p>展 開 後 段</p>	<p>6 自分の生活を振り返る。</p> <p>○本時の学習内容を活用して、「活動」編 (p.23) の「自分と異なる意見も大切にする」について、「このような場合、あなたは どうしますか。」を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1つ目の言い方は、自分の意見だけを伝えているな。 ・2つ目の言い方は、自分の意見は伝えず、相手の意見をだまっけて受け入れているなあ。 ・3つ目の言い方は、相手の意見も聞いて、自分の意見も伝えているよ。 	<ul style="list-style-type: none"> ●パワーポイントを使い、3つの言い方を視覚的に理解できるようにする。 ●パワーポイントで3つの言い方を確認した後、「活用」編 (p.23) を開く。 ●3つの言い方について、それぞれ自分の考えや相手の気持ちを考えているかどうかを考える。 ●3つ目の言い方をペアで互いに言ってみて、その時の気持ちを考え、自分や相手の考えや気持ちを大切にしている言い方を実感させる。
<p>終 末</p>	<p>7 本時を振り返る。</p> <p>○本時の学習から、これからの自分にできることを考えて、ワークシートに考えを書きましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大休憩で遊ぶ時、自分のやりたい遊びばかり言っていたから、今度 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時の学習内容をもとに、自分の考えをワークシートに書かせる。

	<p>からは友だちの意見も聞こう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「全員遊び」をする時に、みんなで楽しく遊ぶために、遊び方も考えないといけないな。 ・公園で友だちと遊び時には、友だちの意見も聞いて、楽しく遊びたいな。 	
--	---	--

9 板書計画



【参考文献】

「シンポジウム 道徳の教育—その可能性と不可能性」, 関西倫理学会編 『倫理学研究』(第 45 号), 晃洋書房, 2015 年

坂本哲彦 『道徳授業のユニバーサルデザイン』, 東洋館出版社, 2014 年

『分けて比べる』道徳科授業, 東洋館出版社, 2018 年

増田謙太郎 『「特別の教科 道徳」のユニバーサルデザイン』, 2018 年, 明治図書

【参考資料②】 研究授業の時の板書

